南條聖一集
47

舟橋聖一集

現代文学大系　47

現代文学大系47　舟橋聖一集

昭和三十九年四月十日発行

著　者　舟橋聖一

発行者　古田晁

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

装　幀　真鍋博

本文用紙　三菱製紙株式会社
表紙クロス　東洋クロス株式会社
本文整版　株式会社精興社
本文印刷　株式会社精興社
製本　株式会社鈴木製本所

東京下落合の自宅庭にて　昭和三十八年十一月

舟橋聖一集　目次

悉皆屋康吉　五
雪夫人絵図　一三三
木石　三二九
老茄子　三五〇
鵞毛　三八〇
白薊　四三一
顔師　四五八
年譜　四七八
人と文学　河盛好藏　四八五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

口絵写真撮影　大　塚　徹

舟橋聖一集

小説は批評で
小説は言論だ

舟橋聖一

悉皆屋康吉

巻の壱

一　章

悉皆屋というのは、昔は大阪ではじめた商売だという。大阪で、着ものや羽織の染模様、小紋又は無地の色あげ、或は染め直しものなどを、請負って、それを京都の染物屋に送り、仲介の労をとって、口銭を儲けたのが、はじまりである。ついでに、しみぬき、洗い張り、ゆのし、湯通しなども引きうける様になった。明治になって、交通の便が開けたから、悉皆屋の存在は、大阪にばかりとどまらなくなった。東京の呉服屋でも、反物を京都に送って染めさせることが、平易になり、それに準じて、必ずしも京都でなくとも、染物業の仲介をするものを、すべて、悉皆屋と呼びなれることになったのである。

康吉の今の主人の梅村市五郎は、日露戦争の頃までは、浅草の馬道で、小さい呉服反物屋をやっていたのが、思いがけぬつてで京都の山春という大きな染物屋にわたりがついたおかげから、急にめきめきと身代が肥えて、震災前には、日本橋きっての、悉皆屋になったのである。

山春の主人は、どういうわけか、市五郎に大へんに目をかけたので、市五郎もここを先途と、誠意を見せて商売を励んだ。そのかげには番頭の伊助という爺さんの働きもかくせなかった。そのうちに、山春の染物は、東京方面は、梅村を通さなければ、手出しの出来ぬ状態になった。こうなると、一々お華客から註文をとらなくとも、悉皆屋仲間の商売の元締をやっていくだけで、却て儲けは大きいことになる。帳場に坐ってさえいれば、いろんなつてを求めて、近所の悉皆屋の主人や番頭が、たのみにくる。

それには、馬道では片寄っているので、東京の真ん中に、せり出す必要があり、身代限りをした綿屋のあとを貰って小伝馬町に店を持ったのは、大正の半ばであった。はじめは、浅草から本所深川方面に、勢力範囲をのばしていったが、次第に、築地から芝、赤坂から四谷、小石川方面にも手をひろげて、梅村と山春のコンビは、竟に東京染物界の大勢を支配するようにまでなったのである。

康吉は、もと吾妻橋をわたってすぐの所にあった稲川というやはり小さい悉皆屋の手代だった。稲川の主人も昔は、大阪市外の稲川でやっていたので、之を屋号にとった。何分大阪出なので、向うに地盤があるから、梅村に張合う唯一の存在であったが、結局、大正に入ってからは、梅村の

勢力に圧倒されて、手代の康吉に、反物をもたせてやり、遂に梅村の軍門に降るようになった。

然し、そうなるまでに、康吉の苦労は一通りではなかったのである。はじめ、康吉が、反物包を背負って梅村の店先に立ち、

「稲川から参りましたが」

と、挨拶をすると、いきなり帳場にいた眉毛の白い、歯抜け爺の大番頭が、

「稲川？　稲川なんて聞いたこともないね。そう、稲川って相撲取はいたね。何かい？　関取衆からの御註文ですかい」

と、意地悪く出て来た。

「へえ、これは不調法でございました。稲川って申しましても、御存知の筈もございませんが、あの、吾妻橋際に店をもっております悉皆屋でございますが」

と、康吉は胸をドキツかせながら、青い顔になっていた。

「へえ、それじゃア、稲川ってのは悉皆屋かい。悉皆屋が悉皆屋に、何の御用かね。若し、同業の相談なら、組合の方に、言って貰いましょうか」

「いいえ、それがお願いに上ったんでございます」

「可笑しいね。悉皆屋が悉皆屋に、願いの筋なんてある筈はないじゃないかね。まあ、おかげでこの頃は、梅村も急がしいから、きまったお華客のほかは、めったに御用はお引受け仕らぬことにしているんだ。だから、帰ってね、稲川の旦那にそういって貰いましょう。生憎と梅村じゃア、稲川さんのように、ちゃんと上方に地盤のあんなさる人の御商売まで、立入ろうたア思っておりませんってね」

「後生です。そんなこと仰有らないで」

――それには返事もしなかった。細いメン棒に、綿をまきつけ、鼻の穴に怖い程さしこんで、薬をつけ出した。康吉は全く取付く島もないのだった。

それでも康吉は、まだ懲りずに、翌日も翌々日も、梅村の店先にあらわれた。まるで根競べであった。伊助というその大番頭も、康吉の根のいいのには、内心驚きながら、彼があらわれると、きまって、鼻薬を出し、メン棒を鼻の孔に突こみながら、皮肉や当てこすりを露骨に見せて、これでもかこれでもかと、康吉をいじめつけるのである。伊助爺は、はじめは稲川のイの字も知らないようなことをいっていて、どうしてそれどころか、稲川の主なる華客先から、京大阪方面の、詳しい勢力範囲に及ぶまで、殆ど何から何まで、知悉しているのであった。これには康吉もびっくりした。成程、このくらいに、気をつかわぬことには、梅村のような成功は、覚束ないのかと、悟るところもあった。

しかし、いくら拒わられても、伊助爺さんから、拒わられているうちは、康吉にはまだ未練があった。主人の市五郎という人は、この爺さんのように、因業である筈がない。きっと、もっと、わかりのいい、思いやりのある人だろう。

何とかして、その人に逢いたい。万一、それでも駄目だったら、せめて、成功した同業の先輩である梅村市五郎の声咳にふれて、将来の己れに資したい――そんな気持まで起っているのであった。

恰度五日目であった。その日は、かきがら町の方に、一軒用足しに行って、そこで暇をつぶし、いつもよりは、二時間程、おくれて梅村の店に行くと、帳場に、いつも頑張っている伊助爺さんの姿が見えず、代りに、結綿に結った色の白い娘が、チョコンと坐っているのであった。そして康吉が丁寧に頭を下げるのに面喰ったのか、ポウッと頬を染めながら、

「あの、今、伊助さんは、馬喰町まで、御用足しに、出かけてますのよ」

と、答えた。

「ああ、さようでございますか。それじゃア恐れ入りますけれど、御主人さまに、お取次下さいませんか」

と、康吉はこの機会を何とか物にしなければならぬと、腹に力を入れた。

「お父さんですか。じゃア一寸、聞いて貰いましょう。二郎――」

と、上り框に控えている手代を呼んで、

「稲川さんて、本所の悉皆屋さんからのお使いでございますって、お父さんに申し上げておくれ」

と、命じた。康吉はその一声が、涙の出る程嬉しかった。これだけにして貰えば、もう、市五郎に逢わないでも、自分の面目は立ったという気がした。ところが、案外、気さくに、市五郎はすぐ立って出て来て、

「稲川さんとこの若い人ですかい？」

と、挨拶をした。康吉は一生懸命になって、今までの行懸りを説明して、すべてを水に流し、今後は全く、稲川も梅村の配下として、よろしく引廻して貰いたいということを陳弁した。

「主人の稲川が、当然、罷出なければならぬところでございますが、昨年の暮、軽い脳溢血をやりまして、右足がまだ十分でないものでございますので、私が代って、罷出たわけでございます。どうか、その点も、悪くお取りにならないで下さいまし」

と、幾度も框に額をすりつけるようにして云った。市五郎もはじめは、ツンとして聞いていたが、段々に康吉の誠意がわかったのか、娘の方を向いて、

「お喜多。お茶でも淹れなさい」

と、くだけていった。お喜多は、はい、といってすぐ奥に引込んだが、やがて、盆にのせて、康吉の前に茶碗を出したとき、康吉はお喜多の、なめらかな白魚のような指先を、目に沁みるような思いで、ジッと見た。

「それじゃア、あんたの気持もよくわかったから、一つ、考えておきましょう。何しろ、この頃は、店のことは、伊助にまかしてあるもんだから、あれに訊かんことには、仕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

事の手順も何もわからんのだから。その上で、なるべく、稲川さんに都合のいいように、計らいましょう。又、四五日したら、来て見てごらんなさい」

と、最後に市五郎は、わけのわかった挨拶をした。しかし、それからも、伊助爺さんにはなかなか話が通じないので、康吉も、なるべく、伊助爺さんのいない折を見るようにして、梅村の暖簾をくぐった。ところが、或日、例の如く、伊助にとっつかまって、長々とお説教を聞いていると、ガラッと障子をあけて、お喜多が出て来て、

「伊助さん、今、笄町の田沼さんからお電話でね、この間、みせて貰った帯をあと二つ三つ花模様を賑かにして急に明日の晩までに、仕立てて貰いたいって仰有るんだけれど——」

と、立ったままでいい、

「あら、康吉さん、いらっしゃい」

と首を下げた。康吉という名前まで、いつ知ったか、お喜多は知っていた。

「そいつは困るね。明日なんていったって、そりゃ無理だ」

伊助はハタと当惑した風であった。笄町の田沼というのは、その頃、売出しの金融界の一人者であり、どんな無理をいわれても、要求に応じなければならぬ破目にあった。

「だっておことわりするわけにはいかんでしょ」

「そう——困ったね——ともかく、誰か取りに上らして……」

「じゃ、お引受けしていいのね」

「困ることは困るが、——まあ、仕方がないでしょう」

「でも、見込が立たないなら、おことわりした方がいいわよ」

「そうですねエ」

と、眉をよせて、今まで、康吉をつかまえて、勝手な御託をならべていた伊助爺も、俄かに、青菜に塩のていたらくであった。

「甚だ差出がましいようですが、それじゃ、私んとこで、何とかいたしましょうか。今すぐ頂けば、今夜、夜業で染めさせて大丈夫、明晩の九時までに仕立てさせます」

と、康吉が、このときとばかり、買って出た。

「ほんとですかい」

と、見る見る、伊助の相好はくずれた。

「きっとお役に立ちましょう。その代り、出来ましたら、昔を忘れて、稲川の店も、目をかけて下さいまし」

「それじゃア、康吉さんにたのもう。二郎——笄町のお邸まで、自転車だ」

お喜多はお喜多で、すぐ電話口に引返していった。二郎は、ガタガタと、自転車を出して、ひらりと飛びのる。

「稲川さんとこは、仕立ものは、どこですかい？」

と、爺さんは、少し、形を更めて、康吉に聞き直した。

「両国の杉野屋で、やらせて居ります」

「杉野屋なら、申分はない」
「では、すぐ工場をかけ合って、また、とって返して参りましょう」
と、康吉は店を出た。お喜多がうしろから、もう一台自転車を貸そうからといった。そして、自転車の置場まで、康吉を案内しながら、
「ほんとに、すみませんのね。――すっかり内幕をお見せしちゃって。だからいつも伊助にいってるんですのよ。同業の方には、とりわけ親切にして上げなくっちゃいけないって」
と、ささやくように云った。

二　章

康吉が、工場から杉野屋にとんでいって、職人の照蔵を拝み倒して、約束通り、その晩の九時に、仕立て上げると市五郎もすっかり上機嫌で、褒美に祝儀包を包んでくれた。そしてそれ以来、康吉は、梅村の家を出入するのに、肩身のせまい思いをしないですむようになった。それでも、時時、こっぴどく、伊助爺さんに、やっつけられることもあったが、それも修業の一には違いなかった。或日も、蔵前の旧い町家の隠居から、白地の紋縮緬一ぴきを、至急深川納戸の無地に染めてくれという註文があった。ところがその頃の康吉は、深川納戸という色を知らなかった。そこで梅村へいって、伊助爺さんにこれこれだというと、

「康さんは、深川納戸なんて、色を引請けて来て、一体どういう色気か知ってるのかい。ちょっとでも、艶が違って、品物が納まらなかったら、どうするんだ。ちゃんと色見本を持って出て、自分に納得のいく色を見立てて貰うんだな」
「へい、ところが、御隠居の仰有るには、深川納戸でなくっちゃならないように仰有るもんですから――」
「だがね、康さん、お納戸には、幾種類もあるんだよ。鴨川納戸、相生納戸、花納戸、橋立納戸、幸納戸、隅田納戸、鉄納戸、藤納戸、深山納戸、深川納戸、大内納戸――ざっと数えただけでも、この通りだ。今のうちでも、深川納戸と花納戸の見分けなんざ、なかなか素人には出来るもんじゃねエ。橋立納戸と鳥羽鼠なんぞも六カしい。一方はお納戸で、一方は鼠だが、一寸見ては、同じようにしか見えねえ。現に、お前さんが引きうけて来た、深川納戸と、鴨川納戸との区別なんか、実に、六カしいんだ。ありきたりの鉄納戸だって、深川や鴨川と並べて見て、どこがどうちがうってことは、なかなか、口に出しては、いえるこっちゃねエ。納戸に花田に鼠にぶどう――こういった傾向の中に、又細かく、種類が分れていて、鼠のうちの紺に近いものと、納戸のうちの藍がかったものとでは、殆ど色気がスレスレになってくる――大雑把に註文してくるお客はいいが、今のように、深川納戸なんて、細かいとこまで註文が出る客には、こっちも亦、それ相応の心得で対わなくっち

ゃあならねエ。山春に出してやるにも、ただ、深川納戸とだけいってやったんじゃア、向うでも、間ちがえるおそれがある。やはり、そういう小面倒な色気を註文するなら、ちゃんとこっちから、色見本をつけてやるのが、悉皆屋の務めだ。そうじゃアないか、康さん」

と、伊助は長広舌をふるった。康吉もこれには一言もなかった。伊助は、手代に手垢のついた色見本のアルバムを持ってこさせて、あっちこっち、めくって見てから、

「サア、この辺が、一帯、お納戸の系統だが、深川納戸を探してみなさい」

「成程」

康吉は色見本を取上げたが、深川納戸を探し出す自信はないので、ドギマギした。

「サア——これは花納戸でござんすな」

「そうだよ。花納戸ってのは、納戸でもずっと、紫がかっているから、紅花田とか、八重紫とか、東花色とかいうものに近い」

「へい、こちらが、鉄納戸でしょうか」

「そうだ。こいつが、一寸濃くなると、もう吾妻花田という名前がつく」

「吾妻花田といいますと、どれでござんす」

「吾妻花田は、第八十一号だ」

「へへえ、成程」

「この頃の若いものは、色見本の勉強一つしないで、悉皆屋でございといって歩くんだから、気が強いよ。私たちの若い時分は、客の註文がひどく手のこんだものだけに、とても、きょう日のやり方じゃア、間に合わなかった。この頃じゃ、名前も廃っちゃったような色の種類が、何百とあって、そいつを皆一目で見分ける修業をしたんだ。当節じゃア、栗皮も茶なら、煤竹も茶だ。私達の若い自分は、そんな鷹揚なことじゃア、通らなかったんだ」

「全く、私共はまだまだ、勉強が足りませんでござんす」

「深川納戸はね、これだよ、康さん」

「へい」

伊助は、納戸部の第四十四号というのを、指し示した。

「どうだね。ところが、この十号っていうのが、又そっくりだろう」

「へい」

「二つ、あてがって、くらべて見な」

「へい」

「じいっと、見つめていると、恐ろしいもんで、違うところがわかってくる」

「へい」

「鴨川と深川の区別がつきゃア、悉皆屋としては、先ず一人前だ」

「へい」

「わかったかい」

「へい、少し、鴨川の方に、ひかりがござんすな。深川は、

くすんで見えます」
「まあ、そんなもんだ。それに名前からいっても、鴨川は京都のもので、深川は江戸のものだ、京都と江戸の心意気だけが、色のおもてに浮いて出るんだ」
「へい」
「蔵前の御隠居は、江戸の人だろう？」
「そうらしゅうございます」
「江戸の人は、やっぱり、江戸の意気で染めたいから、特に、深川納戸と、指定して来なすったわけだ。そういう気六カしいお客の機嫌を買うには、一寸一分ちがっても、いけねエ。深川を、鴨川に染めたり、鉄納戸に染めちがったりしたら大目玉だ」
「へい」
「桐印、納戸部、四十四号、っていう風に、几帳面に指定して、染めに出さないと、思う通りにはいかねエもんだ」
「へい」
「これから、六カしい客の註文をとるときは、よっぽど、慎重にやらねエと、恥をかくぜエ」
「へい」
——康吉はさんざんに油をしぼられた。しかし、伊助も、こういう叱言をいわせると、板についたもので、白い眉毛が、ピンピン、おっ立ち、少し、しゃくれ気味の顎が、反りかえるように動き出して、なかなか器用に啖呵がきれるのであった。

しかし、そのおかげで、十日程して、山春から、その染ものが出来て来たのを、早速とどけると、蔵前の御隠居は、大喜びで、
「こいつは、私の思った通りだ。康吉さんは、さすがに、色を見るカンがいい。若い者には珍しい勉強だね」
と、面目をほどこした。
康吉はこれに懲りて、それからは、数百十とある色の種類を、毎晩、仕事廻りがすんでから、夜なべのつもりで、一心不乱に勉強した。そのうちに、色見本だけでは、満足せず、浅黄と玉川の間に、それを一緒にした玉川浅黄というような色を考えて見たり、利休茶と老松を、つき合したような、利休松という色を染めて見たりした。納戸も藤納戸と大納戸をかけて、もっと、浅く薄くした色を考案して、柳納戸という名前をつけて見たりした。
「こりゃア、面白い色だ。私んとこでも、使わして貰いましょうかい」
と、伊助爺さんも感心した。
「お前さんの発明だから、康吉納戸とでも言っちゃアどうだい。はゝゝゝ」
「とんでもない。みんな、番頭さんのお仕込みのおかげでございますよ」
と、康吉は頭を掻いた。

三　章

そのころ、康吉はもう一度、失敗をやらかした。何でも繻珍の丸帯の註文をうけて、問屋を探しているうちに、やっと註文通りのが見つかった。伝通院の名の通った割烹店の若いお内儀さんのしめる帯であった。その年頃の女のしめる帯は大てい幅八寸二分の仕立てでいい。ところがこのお内儀さんは、人より幅のせまい帯が好きで、八寸を一分出ても気に入らないのである。康吉もそういう点は、十分に念を入れ、粗相のないように、気を配るのだが、魔がさしたのか、うっかり、ふだんの寸法を忘れて、杉野屋から仕立て上って来たのをそのまま、たとうにつつんで、持参した。あけてみて、

「まあ、いいこと」

と、お内儀は大層満足らしく、すぐ、閉じ糸を切って、かけを二つに折ろうとしたが、

「おや？」

と、かすかな疑問の色が、美しいお内儀の眉間をくもらした。

その途端に、康吉は、アッと気がついた。

「いけません――こいつは大しくじりだ」

と、康吉は、向うにいわれぬ先きに、お内儀の手から、その帯を奪いとるようにした。

「へい間ちがえました。八寸二分になって居ります。とんだ粗相でございます」

「いやだねエ、康さんにも似合わないじゃないの。私が八寸でなきゃ、決してしめないことは、何も念を押さなくたって」

「そうなんです。そいつを、全くうっかり」

「うっかりじゃア、康さん、すまされないじゃないの」

「ほんとに」

「いやだよ、まあ、口惜しいねエ」

「へい」

「へいじゃアないよ。折角、こんなに、よく出来て――もう一本というわけにゃア、いかない帯でしょ」

「そうなんです」

「じゃア、どうしてくれるのさ」

「困りました」

「とにかく、八寸二分じゃア、私は、しめられませんから、ね、引取ってくれるでしょうね」

「へい」

「もう少しで、二つに折るところだった。でも、このままなら、しめたというわけじゃないから、誰か、八寸二分でいい人に、買って貰うのね」

「へい……まったく、相すみません」

「その代り、もう一本、大車輪でさがして貰わなくっちゃア――」

「へい」

康吉は、膝の上にひろげた派手な繻珍の織模様を見つめながら、しばらくは、ボンヤリしてしまった。たった二分ぐらい、我慢してくれないのかなアと、お内儀が恨めしい気もした。八寸と八寸二分で、どの位、しめにくいのであろう。失態は失態として、そのくらいのことは、許してやるという気にならないものであろうか。しかし、康吉には、明かにそれが自分の越度である以上、

（いかがでしょう。御辛抱願えませんでしょうか？）

ということは、商売魂の手前にかけて、どうしてもいえない性質であった。

「よろしゅうございます。これはこのまま、お引取りいたしましょう。越度は重々、手前にあるんでござんすから」

そういって、静かに帯を、たとうにしまった。

婦人のお客は、こういう点になると、男以上に、はっきりしている。男だと、随分、ひどい叱言をいう人はあっても、二分や三分の間ちがいは、まず許してくれる。第一、二分や三分には気がつかないのが普通だが、婦人はそういかない。一分一厘までに、気をつかっている。そうして、気に入らないと、何遍でもやり直す。すっかり染め上って、裾廻しまで染まったあとで、もう少し、地味とか派手とかいい出すのは、中年の婦人に多い。だから女だといって、甘く見ることは絶対にできない。残忍性はむしろ女の方に多いのである。この大きな割烹店のお内儀も、顔のわりには、心は薄情と見えて、いい出したら絶対にあとには引かない。康吉がたとうに包んで、風呂敷にしまいこむのを、何の未練もなく、見ている。康吉はなるべく、ゆっくり、包みながら、相手に未練の色のうかぶのを待ったが、徒労だった。お内儀は、平然たる面持で、思いかえすという風は、どこにも見えないのである。

大風呂敷を背負い、自転車にのって、中富坂を下りながら、康吉は腐り切っていた。帯はその頃の時価でも、百三十円ほどのものである。引取るといって、持ちかえって見たが、まさか主人に、損をかけるわけにはいかない。そうかといって、自分が百三十円の弁償をすることは、とうてい考えられない。いったいどうしたらいいのだろう。そう思うと、気が重く滅入って来て、しまいには、目頭が熱くなってくる始末なのだ。

進退谷って、康吉は、方向を日本橋にまげた。苦手ではあるが、こういう場合に、相談に乗って貰えるのは伊助爺さんよりほかになかった。

一部始終を聞き了った伊助は、いきなり、

「馬鹿野郎」

を浴せたが、まあ、その帯を、ひろげて見せろということになって、

「ふん、こりゃアいい帯だ。百三十両なら、安いもんだ。二三日、私に預けて見ねエか。旦那にお話して見てもいい」

と、親切にいってくれた。おかしなもので、反物では羽

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com